

エンジニアのためのドキュメンテーション入門 4

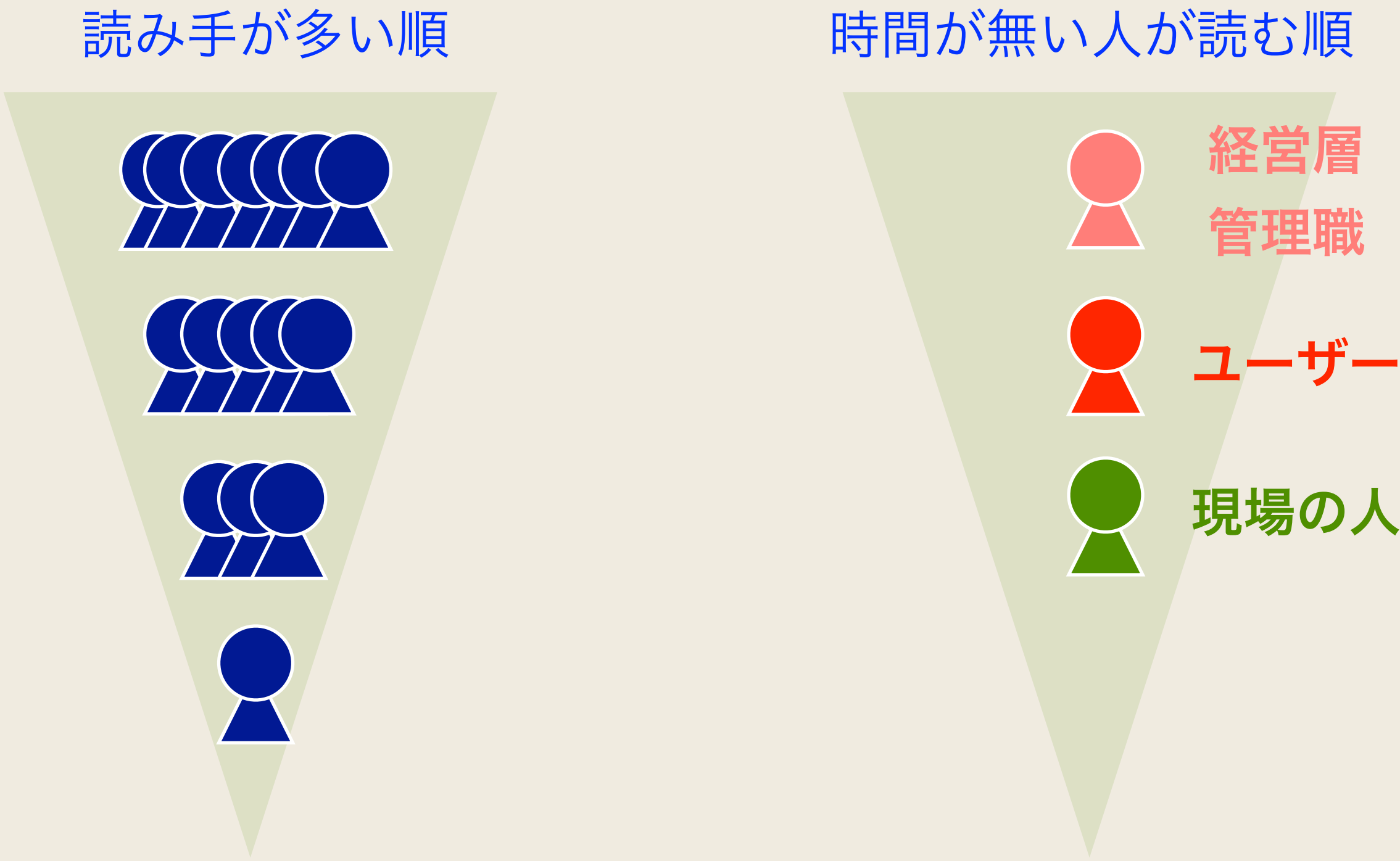
演繹法

運用設計ラーニング

2025-08-27

参考: 演繹法の前に (ビジネス文書)

「読み手が多い」 or 「時間が無い人が読む」 コンテンツを前に記述する



ほとんどの場合
「全部は読んでもらえない」

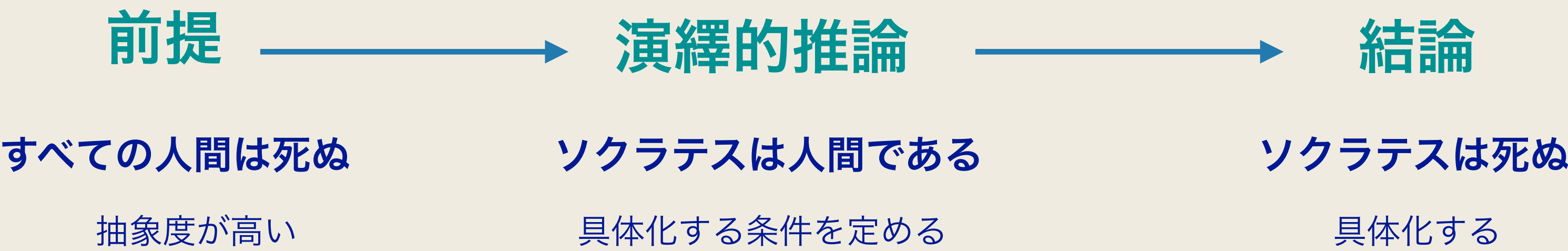
読まれる順を意識しつつ、**全体の流れが不自然でない**ことも重要

エンジニアリングに必要な「演繹」という考え方

演繹

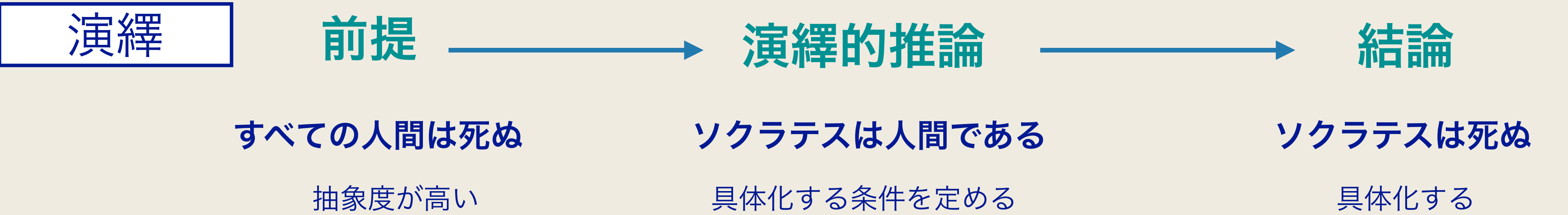
諸前提から論理の規則にしたがって
必然的に結論を導き出すこと。

演繹の基本構造

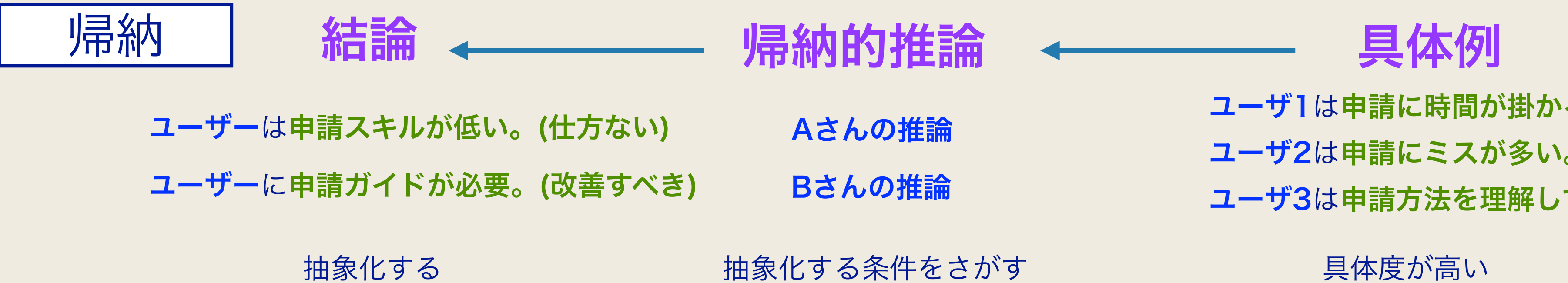


演繹では、前提が同一であれば、必ず結論は同じになる (必然的)

「演繹」と「帰納」



演繹では、前提が同一であれば、必ず結論は同じになる (必然的)



帰納では、結論は同じになるとは限らない (蓋然的)

「演繹」と「帰納」の使いどころ

演繹

前提



演繹的推論



結論

ほとんど全てのビジネス文章は、**演繹で記述**する

前提が変わらなければ結論が同一であるため。(反復・再現性)

帰納

結論



帰納的推論



具体例

文章のうち「分析」や「調査」のセクションのみ「帰納」を使う

分析文書や、調査文書も、その文書構造自体は演繹になる

エンジニアの書く文書は、演繹的推論形式である

「演繹」と「論理」

狭い意味での「論理」 = 演繹

演繹では、前提が同一であれば、必ず結論は同じになる (必然的)

広い意味での「論理」 = 主張と主張の関係

ある主張のまとまり全体と、その部分となる主張との関係も、「論理」と呼ぶことができる。

広い意味での「論理」 = 主張と主張の関係

ある主張のまとまり全体と、その部分となる主張との関係も、「論理」と呼ぶことができる。



論理構造 6つの表現

サポートセンテンスにおいて、概ね6つの表現が使われる

話題が現在位置	話題が先に進む
解説: $A=B$	付加: $A+B$ (AそしてB)
根拠: $A \rightarrow B$ or $A \leftarrow B$	転換: AしかしB
(例示: AたとえばB)	(補足: AただしB)

A: トピックセンテンス or 先行するサポートセンテンス
B: (後続する)サポートセンテンス